

「文脈的照応」における日本語の限定標示

—アラビア語を背景にした分析—

モスタファ ヤスミン (名古屋大学大学院文学研究科博士後期課程)

要旨

定性 (definiteness) とは従来から幅広く研究されてきた言語概念である。定性には、定名詞句 (definite noun phrase) ・不定名詞句 (indefinite noun phrase) の二種類があり、定名詞句は聞き手側から同定可能な名詞句であり、不定名詞句は聞き手側から同定不可能な名詞句であるというような趣旨の説明が一般的であるように思われる。しかし、実際にはこの関係はいつも成り立つわけではない。本稿ではまず、名詞句の指示対象の「同定」は、聞き手のその指示対象に対する既知・未知によって決定されるのではなく、基本的には会話中でもたらされる文脈的情報によって決定されるということを立証する。また、定冠詞や定性標示が付加されている名詞句が全て「定名詞句」であるとするのは正確ではないと主張する。名詞句をその機能によって「限定名詞句」と「定名詞句」の二種類に分類して、本稿では「限定名詞句」を中心に考察を進めていく。

1. 限定性は定性とは異なる概念

丹羽 (2004) によれば、「定名詞句」(同定可能な名詞句)とは、指示範囲が定まった名詞句で、聞き手が指示対象を他の対象と区別することができるものであり、一方、「不定名詞句」(同定不可能な名詞句)とは、指示範囲が定まっていない名詞句で、聞き手が指示対象を他の対象と区別できないものであると述べられている。「定名詞句」は、「既知名詞句」と呼ばれることが多い。本稿ではその機能から、新たな用語を提案したい。それは、「限定名詞句」と「定名詞句」である。

東郷 (2001) によれば、フランス語の定名詞句は機能の面で「指示説」と「存在前提説」に分けられる。「指示説」では、定名詞句 $le\ N$ は N の内包を通して外延に存在する対象 a を指示するのに対し、「存在前提説」では、定名詞句 $le\ N$ は N の記述に一致する対象がどこかに存在するという前提を持つだけで、 a を指示したりはしないと述べられている。指示説では、「既知性」が必要な条件とされるが、存在前提説では、必要とされない¹。

これと同様に、「限定名詞句」と「定名詞句」は異なった概念として扱い、それぞれ次のように説明する。

「限定名詞句」とは、新規の情報として導入された非限定名詞句であっても、後半で限定的な形を伴うと、前半の非限定名詞句と同定される名詞句のことである。このタイプの名詞句は、文中でしか同定されず、実世界に存在する対象と結びつけることは必要とされない。(東郷の存在前提説に類似する)

¹ フランス語は、指示説であれ、存在前提説であれ、定名詞句は一つの形 $le\ N$ を持つという点でアラビア語と同様である。この形は状況により様々な機能を担うことができる。しかし日本語では、限定名詞句と定名詞句がそれぞれ異なった形で表されるため、異なる概念と考えるべきであるということが本稿の主張である。

「定名詞句」とは、話題になっている対象が、発話時点前から対話者の間で共通の知識として同定され、実世界の中から特定の人物や事物を指示対象として特定することができる名詞句のことである。「定名詞句」の指示対象の同定は、言語文脈から独立し、言語文脈外の情報に依存する。(東郷の指示説に類似する)

この二つの種類の名詞句はともに同定可能な名詞句であるものの、常に聞き手にとって「既知」の対象とは限らない。Dik (1981) は、"By means of a definite term the speaker expresses the fact that he acts on the presupposition that the Addressee can identify the particular intended referent(s) of the term in question" (p.61)と述べている。つまり、同定可能であるためには発話時点以前から指示対象を知っていなければならないわけではない。次の二つの例文を見比べてたい。

(1) A: 先週一緒に行った寿司屋さん、もう閉店だそうだよ。

laqad ʔuyliqa matʕam-u l-sushi allaði: ɖahabna: ilaihi maʕan
it has been closed restaurant-NOM DEF-sushi.GEN to which we went together
l-esbu:ʕa l-ma:dʕi:²
last week

B: へえ。あのレストランはおいしかったのに…

lima:ða:ʔ laqad ka:na tʕafa:m-uhu laði:ɖ-a-n
why? it was taste-NOM delicious-ACC-NUN³

(2) きう公園へ行ったとき、ボールで遊んでいる男の子を見た。その子は外国人に見えた。

ʕindama: ɖahab-tu ʔila l-hadi:qat-i ʔams raʔai-tu tʕifl-a-n
when went-i to DEF-garden.GEN yesterday saw-i boy-ACC-NUN.
yalʕab-u bi-l-kurat-i. atʕ-tʕifl-u ka:na shakluhu agnabijjan.
play with-DEF-ball.GEN DEF-boy-NOM looked like a foreigner

例 (1) の B の答えを見ると、確かに指示対象は話し手と聞き手の共通の経験による対象であり、それは、日本語の「あの」とアラビア語の人称代名詞に明確に反映されている。久野 (1973) と東郷 (2000) は、「ア」の使用条件として、話し手と聞き手がともによく知っている実世界に存在する対象に限っている。また、アラビア語の場合も、話し手が聞き手に向かって特定の人物や事柄について話しかけ、聞き手がその指示対象を同定できると話し手が判断した時点で、その名詞を代名詞化することができる⁴。この例文における日本語の「ア」とアラビア語の代名詞の使用は、指示対象を実世界に存在する実物と結びつけることが条件になっていると考えられる。

² l は定冠詞 al- の異形態である。文中の定冠詞 al- は、母音が脱落し、異形態 l で現れることが多い。

³ 不定名詞の語尾のみに現れる活用形であり、定名詞の語尾には現れない。タンウィーンは不定性を表す方法の一つとする見方が多い。不定名詞に付加構造 (属格関係) が後続する場合はタンウィーンが落ちるが、そうでない場合にはタンウィーンが義務的に現れる。

⁴ 「代名詞化」は、同じ単語を反復することを避ける機能があり、代名詞の指示対象はその先行詞となる。(Alnahw Alwa:fi: (1974), Hamf Alhawa:miʕ (1998))

一方、例(2)では、話し手自身が経験したことを聞き手に語っており、聞き手は指示対象を知らず、外界の中から指示対象を指定できないという状況にある。「男の子」はこの発話で初めて登場し、第一の文では、日本語でも裸名詞句（非限定名詞句）、アラビア語でも非限定名詞句（nun. が付加されている）で現れている。一方、第二の文では日本語は指示形容詞「その」に後続し、アラビア語では限定辞 al- を伴った名詞句の形で現れている⁵。東郷(1999)は、談話モデルの中に登録された指示対象は、後続する談話で、定名詞句や代名詞を用いて照応することができると指摘している。アラビア語でも同様の現象が見られる。つまり、「男の子」が談話に初めて登場した時点で、談話モデルに登録されたと考えられる。したがって、第二の文で限定的な形で現れるのは、既に紹介済みの対象であり、話し手と聞き手の短期記憶に一時的に存在しているためである。談話が始まってから登録された対象であるため、過去の共通の知識を指す「あの」ではなく、照応の役割を果たす中立的な「その」が用いられている。ここで、話し手は、公園で実際に遊んでいた「男の子」を聞き手に知ってほしいわけではなく、単に文の後半に現れた「男の子」が前半の「男の子」と同一の対象であることを聞き手に認識してほしいだけだということに注意する必要がある。

以上のことに基づいて、例文(2)について考えると、第一の文に非限定的な形で現れた指示対象 (ʔifl-a-n) は、聞き手にとって、実世界から指定することは不可能な人物である。しかしながら、al- によって、候補者が限定され、第二の文の (aʔ-ʔifl-u) が第一の文の (ʔifl-a-n) と同一の対象を指すことが認識された時点で、その指示対象は聞き手にとっても同定可能になっている。これはまさに、言語文脈領域による同定である。聞き手にとって、指示対象は「言語文脈外」に存在するのではなく、前の文で導入された「ʔifl-a-n」、すなわち「言語文脈内」に存在する。

この二つの例文の考察から、例(1)は「定名詞句」、例(2)は「限定名詞句」として区別して扱うべきだと考える。「定名詞句」は、話し手と聞き手の間で発話以前から同定可能な共有の知識に基づく名詞句である一方、「限定名詞句」は、共有知識でない情報、すなわち、言語文脈によってもたらされる様々な情報を通して、その指示対象が同定可能になるものである。このことを次の表①で示す。

表①

特性 名詞句の種類	同定可能性	既知性
定名詞句	+	+
限定名詞句	+	-

- 定名詞句＝同定可能性＝既知性
- 限定名詞句＝同定可能性≠既知性

⁵ 定冠詞 al-は、後続子音が歯茎音の場合、l が同化する。

この関係から考えると、「定名詞句」と「限定名詞句」は、指示対象を認識する過程が異なっているが、どちらも指示対象を同定することができるという点では共通である⁶。ただし、「定名詞句」における指示対象の同定は、発話以前の情報まで遡って、対象に対する「既知性」とつながるのに対し、「限定名詞句」は、そういった同定の仕方ではなく、他の過程を経て、指示対象を同定するまでに至ったと考えるべきである。

2. 「限定名詞句」の性質とその標示

2.1. 照応とは？

Halliday and Hasan (1976) によると、談話において、ある要素の解釈が他の要素に依存する場合、談話の結束性 (cohesion) が現れる。更に、"cohesion is simply the presupposition of something that has gone before, whether in the preceding sentence or not. This is known as 'Anaphora' (p.14)" と述べている。

山梨 (1992) は、ある言語表現が、後続する言語表現と同一の内容ないしは同じ対象を指す場合、これらの表現は「照応関係」(anaphoric relation) にあるとしている。前者の表現は「先行詞」(antecedent)、これに対応する後続の表現は「照応詞」(anaphor) と呼ばれると述べている。この「照応関係」にある表現は、さらに二つに下位分類される。文脈指示に関わる「文脈照応」と言語文脈外に関わる「外界照応」である⁷。

今西・浅野 (1990) は、照応形は、情報の「既知性」を明示するとともに言語表現の持つ冗長性を削除する機能を持つと述べている。しかし論者は、上記の「定名詞句」「限定名詞句」の考察や提案に基づき、「既知性」ではなく、「同定」のほうが正確かつ包括的であると主張する。

「同定」は、「限定名詞句」と「定名詞句」の両方に共通の要因であり、ある名詞句の指示対象の同定が成し遂げられないと、限定性または定性が認められず、不定名詞句として扱われることになる。そして、指示対象の「同定」が確認された時点で、名詞句の機能がそこでとどまって限定名詞句になるか、更に進んで、指示対象が実際のもものと結び付けられて定名詞句になるかという二つの可能性に分かれることになる。後者は「既知性」を明示するが、前者は「同定」しか明示しない。

本稿では、定性標示を持つ言語の一つであるアラビア語を手掛かりにし、日本語においてそれに相当する言語形式を考察する。世界の諸言語は、言語体系が異なっても、ある程度の類似性が観察されると考えられる。アラビア語と日本語は語族が異なるからこそ、それぞれの体系から推測される相関関係が、従来なかった新たな発想を導く可能性がある。今回の考察を通して、アラビア語と日本語の双方に役立つ情報を明らかにしたい。

2.2. アラビア語の定性標示について

⁶ 東郷 (2001) は、フランス語の定名詞句 le N の使用条件は、「既知性」familiarity ではなく「同定可能性」identifiability であると述べている。

⁷ 「外界照応」(exophora) では、この種の照応詞の先行詞が言語文脈の中には認められず、問題の発話における言語外の場面の中に認められる。

アラビア語には、定性を表す方法が六つある⁸。その中から語頭に付加する定冠詞と呼ばれる「al-」を本稿の考察の対象とする。日本語と対照することにより、日本語の定性標示、または限定辞とは何なのかということが明らかになると考える。日本語には、「al-」に対応するものとして、指示詞「コ」「ソ」「ア」があり、「コ」と「ソ」は、「限定名詞句」に現れる「限定辞」であると考え、「ア」は、「定名詞句」に現れる「定性標示」であると考え。本稿では、「限定名詞句」を中心に考察を行うため、「コ」と「ソ」のみを扱う。

2.2.1. 拘束形態素「al-+名詞句」の機能

「al-」は定性標示であり、指示対象を限定する方法の一つであるとされている。「al-」には二つの用法がある。「照応的な(alṣahdiyyah)用法」と「総称的な(aljinsijyah)用法」である。

2.2.1.1. 照応的な用法 (al- alṣahdiyya)

この種の「al-」が付いた不定名詞句はある程度の限定性を帯び、その指示対象は、曖昧で非限定的なものから限定的なものになる。「照応的な用法」は更に三つに分けられる。それらは、「文脈的照応(alṣahdu ḍḍikri:)」 「観念的照応(alṣahdu ḍḍihni:)」 「知覚的照応(alṣahdu l-hudʿu:ri:)」である⁹。本稿では、「文脈的照応(alṣahdu ḍḍikri:)」のみを扱い、その性質を明らかにした上で、日本語に適用する。「観念的照応(alṣahdu ḍḍihni:)」と「知覚的照応(alṣahdu l-hudʿu:ri:)」を簡潔に説明すると、前者は、その指示対象が実世界に存在するものとして同定され、既知の情報として頭の中で蓄えられるものである。この種類の照応には、過去の経験や出来事が含まれる。一方、後者は、発話が始まってから指示対象が限定され、指示対象の同定には発話の現場に跨る全ての要因が関わる。この種の照応は、「現場指示」に対応する。

2.2.1.1.1. 文脈的照応 (alṣahdu ḍḍikri:)

前述されたものに言及する「al-」である。このタイプの照応では、ある名詞句が文に二回現れた場合に、一回目は非限定的な形で現れ、2回目は「al-」を伴って現れる。この「al-」は、この二つの名詞句の関係を表し、二つ目の名詞句の指示対象を一つに限定し、その指示対象が一つ目の名詞句の指示対象と同じものであることを示す役割を果たす。このことは次の例文で説明する。

- (3) Nazala matar-u-n. Faʔanfasha (l-matar-u)_{1i} zuru:f-ana:
 it rained rain-NOM-NUN revived DEF-rain-NOM our plants-ACC
 雨が降った。(その雨は)_{1ii} 我々の植物を清新にした。
- (4) ja:ʔa dʿaif-u-n. Faʔakrama (l-dʿaif-a)_{2i} l-wa:lid-u
 came guest-NOM-NUN welcomed DEF-guest-ACC DEF-father-NOM
 お客様が来た。お父さんは(そのお客さんを)_{2ii} もてなした。

例文(3)、(4)では、後半で繰り返し現れる「al-」を伴った名詞句(以下「al-+名詞句」とする)(l-matar-u) (l-dʿaif-a)が、前半に登場している非限定的な名詞句と同一の指示対象を持っているこ

⁸ 筆者は、「定性」よりも「限定性」と名づけたほうがより正確であると考え。

⁹ 「観念的」及び「知覚的」という用語は、李(1994)から借用している。

とを示している。このような意味で用いられる「al-+名詞句」は代名詞のようにみなされ、「al-」が付加されていない一つ目の名詞句がその先行詞になる。アラビア語では、人称代名詞が文の表層構造に現れることもあれば、隠れて文の深層構造に現れることもある¹⁰。深層構造で認識される代名詞は「隠れた代名詞」と言い、語句相互の統語的な関係でその意味が理解できる¹¹。この二つの例文で後半に現れている「al-+名詞句」は、意味を変えずに代名詞に置換可能なため、代名詞に相当する機能を持つと見なして良い。このことを次の例で示す。

- (5) Nazala matar-u-n. Faʔanfasha (li) zuru:f-ana:
 it rained rain-NOM-NUN Revived our plants-ACC
 雨が降った。(その雨は) _{iii}我々の植物を清新にした。

- (6) ja:ʔa dʕaif-u-n. Faʔakrama-(hu)_{2i} l-wa:lid-u
 came guest-NOM-NUN welcomed-3SG.M DEF-father-NOM
 お客さんが来た。お父さんはその(お客さんを) _{2ii}もてなした。

(3)の(l-matar-u)と(4)の(l-dʕaif-a)は、(5)と(6)でそれぞれ隠れた代名詞と拘束代名詞になっているが、意味の変化は生じていない。(3)の前半の名詞句である(matar-u-n)は非限定的な名詞句であり、どのような雨であるかは示されていない。しかし、後半の「al-+名詞句」は限定的な名詞句であり、その指示対象は前半の非限定的な名詞句に限られている。例文(4)も同様である。後半の「al-+名詞句」の指示対象は、前半の非限定的な名詞句であるが、実際の人物は指していない。この限定的な名詞句の指す意味は、文前半の非限定的な名詞句の指す意味に限られているため、指示対象の意味はあくまで文のレベルでしか同定されておらず、文を超えて、外界に存在する事物と結び付けられているわけではない。つまり、「al-+名詞句」と先行の名詞句の間には同一指示関係が成り立っていると言える。

以上の「al-+名詞句」の「文脈的照応」の用法に基づいて、日本語においては、それに対応する標示が何なのかということについて、以下で詳細に考察する。

¹⁰人称代名詞には、独立した形式と語尾に付加される拘束形態素の二種類がある。ここでいう人称代名詞は後者の拘束形態素である。拘束代名詞には文の表面に現れる代名詞と隠れた代名詞の二種類がある。

¹¹アラビア語では「隠れた代名詞」と「省略された代名詞」は異なった概念として定義される。「省略された代名詞」は、もともと文に現れていたが、何らかの理由で省略され無視された代名詞である。「隠れた代名詞」は、そもそも文の表層に現れることができないが、統語的に理解することができる。「隠れた代名詞」になり得るのは、主語の位置にある語のみである。一方、「省略された代名詞」になり得るものは、主語以外の位置にある語である。両者の性質が異なるからこそ、あえて「省略」ではなく、「隠れた」という用語を用いている。

2.3. 例文のデータの考察

2.3.1. 結果の全体的概要

アラビア語の「al+名詞句」の「文脈的照応」に対応する日本語の言語表現を考察するために、40文のアラビア語の例文を作成・引用し、それらを日本語に訳した。文の前半の非限定的な名詞句が現れる位置が後半の名詞句の標示に影響を及ぼすかどうかを包括的に考察するため、文の前半に導入される非限定的な名詞句が現れうる様々な位置について、役割及び時制の面から九つの可能性を考慮し、それぞれにいくつかの例文を作った。これらの可能性は、

1. 主語+過去→7文
2. 主語+現在→4文
3. 主語+未来→4文
4. 目的語+過去→14文
5. 目的語+現在→3文
6. 目的語+未来→2文
7. 前置詞句+過去→4文
8. 前置詞句+現在→1文
9. 前置詞句+未来→1文

である。ここで次の仮説が立てられる。

仮説

「al+名詞句」に対応する日本語の言語形式が日本語における「文脈的照応」の標示であり、それを、名詞句を限定する機能がある限定辞（または限定標示）と呼ぶ。

以下で分析対象の例文のデータを考察する。まず、限定標示の全体の使用率を、次の表②にまとめる。

表②

割合 \ 指示詞	この	その	この・その 両方可	この・その 両方不可
40文の内	9	24	6	1
割合	22.5%	60%	15%	2.5%

全体的に見ると、「その」が60%以上の割合を示している。

次に、役割と時制による使用率を以下の表③にまとめる。

表③

役割と時制	例数	この	その	この・その
主語+過去	7	1	5	1
主語+現在	4	3	1	0
主語+未来	4	1	2	0
目的語+過去	14	3	9	2
目的語+現在	3	0	1	2
目的語+未来	2	0	2	0
前置詞句+過去	4	1	3	0
前置詞句+現在	1	0	1	0
前置詞句+未来	1	0	0	1

以上のデータから見ると、「主語+現在」以外は、「ソ」の使用が一般的に優先的であった。ところが、「主語+現在」の組み合わせの場合には、「コ」の使用が「ソ」よりも優先的であるように見られた。次の三例を参照されたい。

(7) ya?ti: ila maharaga:ni 'kan' mumaθθilu:na min gami:ʕi l-bila:di, wa yuʕtabaru min ahammi taqa:li:di ha:ða: al-mahraja:ni muru:ru l-mumaθθil-u:na fawqa l-busa:tʕi l-ahmari qabla l-duxu:li ila mabna l-mahraja:ni.

カンヌ映画祭には、世界中から多くの俳優がやってくる。{これらの俳優/△それらの俳優}が言うには、赤い絨毯の上を歩くことは、伝統的な行事となっている。

(8) fi fasʕli l-xari:ʕi fi misʕra tahubbu riya:h-un munʕishat-un tulatʕʕifu min hara:rati sʕsʕaifi. taʕti: al-riya:hu ʕa:datan min al-gihati l-shama:liyyati l-yarbiyyati.

エジプトでは秋に夏の暑さを緩める涼しい風が吹きます。{この風/?その風}はたいてい北西の方向から来ます。

(9) ya?ti: fanna:nu:n min muxtalafi anha:?i l-ʕa:lami ila misʕra lihudu:ri maharaga:ni l-qa:hirati s-sinima:?iyi d-duwaliyi. wa yantahizu l-fanna:nu:na l-fursʕata lilistimta:ʕi bimaʕa:limi misʕra s-siya:hiyyati.

カイロの国際映画祭に参加するため、世界各国から多くの芸能人がエジプトにやってくる。{これらの芸能人たち/?それらの芸能人たち}は、その機会を活かし、エジプト観光も楽しんでゐる。

例文(7)、(8)、(9)では、前半に非限定的な形で登場している「多くの俳優」「風」「芸能人」は主語の位置に現れている。後半で限定的な形を帯びる名詞句は、「コ」を伴っている。しかし、文

中における役割と時制によって「コ」が優先的に使用されるか否かを判断するには、さらに、他のデータを分析する必要がある。そこで、主語の位置に置かれている単数の名詞句に限って例文を作成したが、これはかなり困難な作業であった。主語の位置に置かれた単数の名詞句が、現在形において非限定的な形で現れるのは、他の時制に比べ、かなり数が限られているように思われる。現在形を使って何かを説明しようとする場合、指示対象は知覚的に同定できることが多い。したがって、指示対象を初めて見聞きしたとしても、眼前で確認し他と区別できる状況にあるため、ほとんどの場合は限定名詞句で導入される。そこで、コーパスを使うことにし、『新潮文庫の100冊』【Sin100より、あすなる物語／井上靖(402頁):106305(20ページまで)および、芥川龍之介(9ページまで)】から該当の例文を検索した。ところが、検索の範囲では一文しか見つからなかった。更に、この文の後半は、名詞句が「コ」でなく、「ソ」を伴っていた。

以上のデータから考えると、この現象を支持する例文が十分見つからなかったため、「主語＋現在」という組み合わせだけは、「コ」が優先的に用いられると判断することはできない。しかし、「コ」の性質について広く考えると、現場指示において、話し手が現在の発話で自分に近いものや自分の勢力範囲内にあるものを指すのに「コ」を用いるので、文脈指示においても、話し手が現在の状況を説明するときには、「コ」が用いられやすくなると推測できる。今回は、データがこれ以上手に入らなかったため、推測に留めておく。今後は、更なるデータを収集して、この点の検証をするつもりである。

2.3.2. 数と指示詞選択との関係

今回「主語＋現在」という統語的な要因は、指示詞の選択に決定的ではなかったため、名詞句の「単数・複数」が「コ」「ソ」の使い分けに優先的な要因なのではないかと考えた。

分析対象の例文においては、数によって指示詞の使い分けが見られた。以下に、分析対象の例文に現れた複数形の例文をいくつか挙げる。

(10) yaʔti: ila maharaga:ni 'kan' mumaθθilu:na min gami:ʕi l-bila:di, wa yuʕtabaru min ahammi taqa:li:di ha:ða: al-mahraja:ni muru:ru l-mumaθθil-u:na fawqa l-busa:tʕi l-ahmari qabla l-duxu:li ila mabna l-mahraja:ni.

カンヌ映画祭には、世界中から多くの俳優がやってくる。{これらの俳優／△それらの俳優}が言うには、赤い絨毯の上を歩くことは、伝統的な行事となっている。

(11) fi atʕ-tʕari:qi baina madi:nati yirna:tʕa wa almeriyya fi aspanya tu:jadu tʕawahi:nu hawa:ʔ-in baida:ʔin kabi:ratin. tustaxdam atʕ-tʕawahi:nu litawli:di l-kahraba:ʔi.

スペインのグラナダとメリアの間を走る道路には、大きくて白い風車がいくつもある。{△これらの風車／それらの風車}は発電に使われる。

(12) bana: al-fara:ʕinatu ahra:ma:tin ʕazʕi:matin. ashharu l-ahra:ma:ti hiya xu:fu: wa xafraʕ wa manqaraʕ al-ka:ʔinu:na bimuha:fazʕati l-ji:zati.

古代エジプトのファラオは巨大なピラミッドを建築した。{これらのピラミッド/それらのピラミッド}で最も有名なのは、ギザの三大ピラミッドであるクフ王、カフラー王、メンカウラー王のものだ。

6つの例文の内、「コ」のみが2文、「ソ」のみが2文、どちらも可が2文という結果が得られた。この結果から見ると、複数形は「コ」で指しやすいように考えられる。このことを立証するためには、さらにデータを分析する必要がある。そこで、複数形を中心に例文を作成し、以下でそのデータの分析結果を考察する。

データ分析

複数形では連体詞「コ」の容認度が高くなるのではないかという予測が得られたため、複数形を中心に13文のアラビア語の例文を作成し、それを日本語に訳して分析した。その結果、「コ」を用いた例文は6文、「ソ」は6文、どちらも可能な例文は1文、という結果が得られた。つまり、使用率が半々であった。

(13) tagamhara f'ulla:b-un ama:ma maqarri l-ga:miṣati bilamsi. Wa f'a:laba t'-f'ullabu bistiqa:lati ra?i:si l-ga:miṣati.

昨日大学の前に多くの学生が集合した。{これらの/*それらの}学生は学長に辞職を求めた。

(14) ra?aitu at'fa:l-an yalṣabu:na l-kurata fi ḡ-ḡariṣi. fanabbahtu l-at'fa:la ṣala xuf'u:rati ha:ḡa: l-fiṣli.
道路でボール遊びをしている子供たちを見た。いかに危険なのかということ(△これらの/それらの)子供たちに)注意した。

また、ニュースのニュアンスがある例文は、「コ」を取りやすいという傾向が見られた。

(15) waqaṣat fi l-arjinti:n ha:diḡat-un bashiṣatun; haiḡu is'ṣadama qit'a:run biras'i:fi l-mahat'ati. wa qad tuwufiya fi l-ha:diḡat-i ma: yaqrubu min arbaṣi:na shaxs'an wa us'i:ba akḡara min subṣuma?atin a:xari:n.

アルゼンチンで、電車がホームに突っ込む悲惨な事故が起きた。{この事故/△その事故}で、およそ400人が死亡し、700人が怪我をした。

(16) alqa: al-maglisu l-ṣakariyyu baya:n-an ha:mman bil?amsi. s'arraha fi l-baya:ni anna intixa:ba:ta r-ri?a:sata satatimmu fi niha:yati shahri yunyu: al-qa:dimi.

昨日軍事会議が重要な発表をした。{この発表/△その発表}によると、大統領選挙は6月下旬に行われるとのことだ。

以上の結果をまとめると、「文脈的照応」においては、「その」の方が一般的に使用頻度が高いという傾向が見られた。時制による「コ」「ソ」の使い分けははっきりしなかったため、「コ」「ソ」の使い分けに統語的な要因が働いているとは判断しにくい。しかし、数によって、「コ」「ソ」の使い分けが相対的に見られた。本稿の目的は、文脈的照応における「コ」「ソ」の使い

分けを考察することではなく、日本語の「限定辞」及び「定性標示」とは何なのかを明らかにすることであるため、「ソ」「コ」の使い分けに関する分析はここで止めたい。以上を要約すると、以下のようになる。

- アラビア語の「al-+名詞句」における「文脈的照応」の用法に対応する日本語の指示詞のうち、「ソ」が定番型であるのに対して、「コ」は条件付きの型である。「ソ」は一般的に幅広く用いられるが、特定の条件の下では、「コ」が優先されることがある。

3. 結論と今後の課題

本稿では二つの論点について考察してきた。一つ目は名詞句の「同定可能性」に関わる状況と、「限定名詞句」と「定名詞句」が異なる概念であること、二つ目は「限定名詞句」の性質と標示についてである。「同定可能性」については、話し手と聞き手の既知の知識のみならず、発話現場や発話時点に関わる全ての要因も、同定可能性に大きな影響を及ぼしていることが明らかになった。指示対象の同定を可能にする情報は「言語文脈内」にも存在しており、「言語文脈外」のみに存在しているのではない。すなわち、指示対象の「同定可能性」は、「言語文脈領域」の中で決定され、必ずしも実世界から他のものと区別されたものとして取り出されるとは限らない。

「定名詞句」は、限定的かつ同定可能な名詞句である一方、「限定名詞句」は、同定可能な名詞句でありながら、常に「定名詞句」とは限らないということが例文を通して明らかになった。そこで、「限定名詞句」を「定名詞句」とは区別して扱うべきであると提案した。アラビア語では、統語的には、定冠詞「al-」が定性標示であると定められているが、語用論上は、限定のみを表したり、定性を表したりすることができる。先行研究では、「照応的な用法」と「総称的な用法」、そして、それらの下位分類のみが扱われているが、本稿では、用法によって、役割が大きく変わってくるということが明らかになった。そのため、アラビア語でも、「al-」が統語的に定冠詞であるとしても、その用法は、「限定辞」と「定性標示」に分類すべきである。日本語の例から明らかになったように、「限定名詞句」と「定名詞句」には、それぞれ別の標示がある。本稿で扱った「文脈的照応」は「限定名詞句」の特徴であり、「定名詞句」の特徴ではない。さらに、文脈的照応において、「ソ」も「コ」も名詞句を限定する「限定標示」だが、「ソ」が定番型であるのに対して、「コ」は特定の条件下で優先される。このように、ソ・コは「限定標示」ではあるが、「定性標示」ではないと結論付けられる。今後も、アラビア語の「観念的照応」を手掛かりにし、日本語の対応する標示を考察していきたい。用法、それから意味、様々な観点から、それらが日本語の定性標示と言えるかどうかを明らかにしたい。

参考文献

- 1 池内正幸 (1985) 『名詞句の限定表現』大修館書店
- 2 今西典子・浅野一郎 (1990) 『照応と削除』大修館書店
- 3 榮谷温子 (1998) 「アラビア語の限定名詞句の用法：主に童話のテキストの書き出し部分について」『日本中東学会年報』第13号 pp. 257-285
- 4 東郷雄二 (1999) 「談話モデルと指示 —談話における指示対象の確立と同定をめぐる—」『京都大学総合人間学部紀要』第6巻 pp. 35-46

- 5 東郷雄二 (2000) 「談話モデルと日本語の指示詞コ・ソ・ア」『京都大学総合人間学部紀要』第7巻 pp. 27-46
- 6 東郷雄二 (2001) 「定名詞句の指示と対象同定のメカニズム」『フランス語学研究』第35号 pp. 1-14
- 7 西山佑司 (2003) 『日本語名詞句の意味論と語用論 —指示的名詞句と非指示的名詞句—』ひつじ書房
- 8 丹羽哲也 (2004) 「名詞句の定・不定と存否の題目語」『国語学』第55巻2号 pp. 1-15
- 9 山梨正明 (1992) 『推論と照応』くろしお出版
- 10 李長波 (1994) 「指示詞の機能と「コ・ソ・ア」の選択関係について」『京都大学文学部国語学国文学研究室』63巻5号 pp. 37-54
- 11 Assaiyouty, AlImamu Jalal Eldin ʿabdul Rahman Ibn Abi Bakr (1998) *Hmfi Lhawa:miʿ fi Sharhi Jamʿi Ljawa:miʿ*. Dar Alkutub Alʿilmiiyya
- 12 Dik, Simon C. (1981), *Functional Grammar*. Dordrecht, Holland;Cinnaminson, U.S.A. : Foris
- 13 Halliday, M. A. K. & Hasan, Ruqaiya (1976), *Cohesion in English*. Longman Group Limited.
- 14 Hassan, Abbas (1974), *Alnaḥw Alwa:fi:.* Dar Almaʿa:rif

使用したコーパス

1. 自作の例文
2. 新潮文庫の100冊